

中国絵師の技術、つなぐ

琉球王府に仕えた絵師は中国絵画を模写し、その技法を習得することが常道だった。現代の沖縄の画家たちは、琉球王国文化遺産集積・再興事業で琉球の絵師たちの手わざを習得する機会を得た。

琉球紅型の人間国宝、鎌倉芳太郎(1898〜1983)は琉球文化の先駆的な研究者で知られる。その鎌倉が琉球美術について広く調査した「鎌倉ノート」と呼ばれる記録がある。ノートには、琉球王府の撰政を務めた読谷山朝憲(1745



四季翎毛花卉図巻(模造復元品)の製作工程見本―沖縄県立博物館・美術館

〜1811)が所蔵したとされる「四季翎毛花卉図巻」について、モノクロ写真(部分)2枚を添えて紹介している。その巻末に落款「丁亥初夏中山具師度写」があるとして、作者は山口宗季(具師度、1672〜1743)であり、さらに読谷山家が今次大戦の犠牲となり、その壮大な邸宅と共にこの図巻も消失してしまったと記している。山口は王府が中国南部の福州(現・福建省)に派遣した留学生の宮廷絵師だが、のこされた作品は数少ない。琉球王国文化遺産集積・再興事業では、山口作とされる「四季翎毛花卉図巻」を、鎌倉が撮影した写真を原資料に模造復元することを決定。東京芸術大学大学院の荒井経教授が指導する保存修復日本画研究室が製作を担当した。

全長7尺を超える1枚の絹に、四季折々の植物や鳥が鮮やかな色彩で描かれている。中国清代に福州で活躍した画家孫億(1638〜?)の優品「花鳥図巻」(1712年)だ。この作品に付属する包装には、朝憲の一文がある。「花鳥

沖縄の画家ら、「図巻」復元模写



「図巻」は孫億の自筆であり、琉球の宮廷画家たちが長らく手本とし、決して他国に持ち出してはならないなどの内容が書きとめられている。

孫億は王府が派遣した留学生の師であり彼の作品は「パイブル」として後々の世代にまで多大な影響を与えた。留学中の山口は、孫億から直接指導を受けた。荒井教授からは2015年12月、孫億の元花鳥図巻を購入目的で調査・研究中だった九州国立博物館に熟覧のため訪れた。予想外のことが起きていた。孫億の「花鳥図巻」と鎌倉が撮影した「四季翎毛花卉図巻」の図巻を比較すると、図巻構成が

完全に一致するだけでなく、絵の具の剥落や折れ目など損傷箇所などもどこどこと一致するところがあった。

荒井教授には兼ねてからの目的があった。「習得した中国絵画の手わざや修復技術を沖縄の画家たちに継承してこそ事業の価値が高まる」ともに沖縄県立芸術大学大学院の卒業生で画家の喜屋武千恵さん(51)と平良優季さん(31)に白羽の矢を立てた。

荒井教授は発想を変えた。「孫億の絵画を模写した山口宗季に我々現代人がなりかわって模写することを実現して、制作当初の色彩と技法の模造復元を目標にした。」

2人は模造復元品「四季翎毛花卉図巻」の「春」の一場面を製作する際、重要な4種類の製作工程見本を東京芸大チームと共同でつくることになった。①絹の上に墨で輪郭線を描く「絹上げ」②絹の裏面に彩色する「裏彩色」③絹の表に彩色する「表彩色」④完成品の4種類。東京と沖縄を何度も往復して製作した。

絹の反物を巻き目なく描ける装置を考案した。反物の上下の端をひもでトンボリン状に結び、上下方向に引っ張る。絵を描くスペースを一定間隔あげ、その両脇は上下を板で挟んで固定する。ぴんと張られた絹の上で絵を描き、その部分を描

「同じ作品でも東京で見ると柔らかく見え、沖縄だと輝いて強く見える。沖縄で描く意味を考えさせられた」と喜屋武さん。「孫億の手を学ぶことで、作家の目線、作品に対する思い、熱量、技術も含めてみる事ができた」という平良さん。だが、一緒に作業した中国人留学生の腕前に悔しい思いもした。「中国に留学した琉球の絵師たちも同じ思いを味わったのかも想像できない」



反物を巻ながら1枚の絹に模写を描く=製作者提供

製作を終えた荒井教授はこう話した。「戦争や火災など不慮のトラブルに耐えていくには、常に誰かが手わざを受け継いでいくことが重要だ」(上林格)